

図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（第1回） における主な意見

<御発表>

堀川委員「図書館・学校図書館の運営の充実に向けて」

- 「読書」の概念について、2004年の文化審議会の答申では「文学作品を読むことに限らず、自然科学・社会科学関係の本や新聞・雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する本を読んだりすることなども含めたものである」と記述された。現行の学習指導要領の国語科においても、情報の扱い方に関する事項というものが新設され、調べ読み、あるいは情報読みなどの言葉もあった。また、OECDのPISAの問題に見られるように、「読む力」は、文書を読むだけでなく、非連続型テキスト、グラフや図表などを読む力も必要とされる。その他、「デジタル・リテラシー」は、デジタル資料を読むことに加えて、デジタル機器の操作が必要なことが指摘されている。
- 今年の2月から5月にオンデマンドで実施した文部科学省「令和5年度学校図書館担当指導主事会議」におけるアンケートによると、各自治体において特に力を入れていること及び特に課題になっていることのうち、「図書の整備」という項目が最も多く回答される結果となった。また、「学校図書館におけるICTの活用」という項目が特に課題となっていることとして目立つ。
- 第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」において、公共図書館と学校図書館に同じ領域が設定されており、その2種の図書館がこれらの領域を共通して検討してすり合わせる必要があるかつ効率的である。
- 子供が利用できる時間は学校図書館の方が長い、予算や人員、資料規模等においては公共図書館の方が豊富である。そのことから主に公共図書館から学校、あるいは学校図書館を支援する図式になっているのが現状である。
- 学校図書館の課題として、図書をはじめとした整備、司書教諭の発令などが挙げられる。
- 公共図書館の課題として、多様な子供たちへのニーズへの対応、図書館事業への子供の参加の工夫、児童生徒向けの電子書籍やデジタルコンテンツの精選や充実が挙げられる。

<意見交換>

I. 社会変化等を踏まえた図書館・学校図書館の運営充実の在り方

1. デジタル社会への対応

- 初等教育における紙の本はすごく重要だが、小学校上級、中学・高校にいくに従って小説をサイトで読むという人にも多く会い、不読者へ紙書籍でなくデジタルで読むことを勧めるほう

が、読書に親しむ敷居が低くなる可能性もあり、新たな読書推進活動として捉えてよいのではないか。ディスプレイ上で長文を読ませる機会がこれまで少ないため、これからは積極的に教育に取り込んでいってもいいのではないか。

○図書館の資料もタブレットの端末の資料も、両方を用途に応じて活用していきたいと考える。
電子書籍に関心をもつ生徒やウェブで多様な資料を使いたいという生徒、紙の本が好きで（紙の）本で調べたいという生徒もいる。

○幼い段階から活字に触れる機会が重要と考えるが、デジタルを使う時間もあると活字を読む優先度が低くなり、調べ学習も下手をすると検索して終わりとなりかねない。読書をする、あるいはデジタルに触れるというのは一体何のために行うのかという目標と手段が整理できていないことも現場でありがちで、その点を整理して図書館を活性化していくことが必要。活字で調べること幅広い周辺知識に触れることができる面もあり、それをどのような仕組みにできるか考えたい。

○ICT活用推進校では、タブレットを使いこなす高学年の児童もいる一方、教員からインターネットを使った調べ学習が効果的に行われていないとの悩みも聞いた。学校図書館は情報活用能力の育成をサポートできると考え、参考図書やインターネット情報の利用指導を行い、調べ学習を支援してきた。例えば、（紙の）参考図書の図鑑や辞典を活用できるようになった後にデジタル百科事典やインターネット検索の仕方を学ぶなど、スモールステップでスキルアップしながら繰り返し指導することで、児童が自ら紙かデジタルか選択して意欲的に調べる様子に変化を実感できた。

○GIGAスクール開始時に県内の市町村教育委員会の状況を聞くと、学校図書館の司書にタブレットが支給されていない、ソフト利用のアカウントが発行されていない、ICT活用教育に対する研修の機会がないなどの様々な状況があった。基準等の文言を変えるだけにとどまらず、会議の議論の結果をいかに現場の環境改善につなげていくかについての議論も期待する。

○今後、学校の学習環境は、デジタル学習基盤をベースに、学校、カリキュラム、教室環境、授業、教師の仕事の在り方を抜本的に問い直して再構築することに進むと思う。デジタル教科書を基にした授業の経験は、デジタル書籍の利用の契機になるだろう。一方、デジタル学習基盤はデジタルに置き換えるということでは全くなく、紙に限らないアナログの学びの環境・経験とデジタルの学びの環境・経験をどう有機的に接合して作るかという問の中で議論が進んでいる。その中で図書館・学校図書館の在り方が考えられるとよい。

○図書館をめぐる様々な環境が変化していく中で、都道府県立図書館の役割が大きくなっていると考え。大規模災害時における役割、読書バリアフリーの牽引役、デジタルアーカイブシステムや電子書籍の導入、デジタルシフトの進展においてプラットフォームを構築するなど、様々な役割が期待されていると考える。

2. 多様な人々のための読書環境の整備

○読書の在り方そのものや内容も多様化している。そうした多様な読書というものを捉え、かつ政策的な提言で終わらずに、日本中で実効的に作用する提言のようなものが最終的にでき

ると良い。

- 特別支援教育の対象となる児童生徒数は増加傾向にある。また、読書バリアフリー法により主に視覚障害者への電子書籍の提供等は充実した部分も見られるが、まだ他の障害種別については十分な対応が各学校できていないのではという所感である。インクルーシブな学校運営と関連させた学校図書の整備等も今後検討していただきたい。
- 小中高校の学校図書館で、通常クラスで学びながら支援が必要な子供がアクセシブルな書籍等を利用できるための環境をどう充実させていくかが非常に重要になってくる。その際、障害児のみならず、日本語指導が必要な子供たちに対しても、やさしい日本語や多言語資料へのアクセス、また、紙だけでなくデジタルも含めて利用できる環境をどう充実していくのが重要である。
- アクセシブルな書籍等の扱いについて、図書標準の中でどう検討していくかも非常に重要である。
- 認知症の方々が安心して利用できる公共図書館の環境づくり、認知症バリアフリーの観点も重要である。

3. これからの子供の学びを支える読書環境の充実

- 学校施設の建て替えの時期を迎えてきているが、子供や先生から学校図書館を学校の真ん中に置いてほしいという意見が多かった。司書の育成等のソフト面も大事だが、（学校図書館を中心に位置づけるなど）施設等のハード面を実現していくことで解決できる課題もあるのではないかな。
- 図書館が地域社会に貢献するためにどのようにあるべきか、学校図書館がGIGAスクール構想の下で学校図書館がどのような役割を果たすのか、果たすためにどのように変革しなくてはいけないのかを考えていきたい。
- 子供の読書だけ切り離して検討しても、子供のそばにいる大人が読まないのであれば読書の率というのは上がっていかないのではないかな。
- 単に本を読む場所だけではない機能をどう付加していくのかについても御議論いただきたい。

Ⅱ. 図書館・学校図書館の運営上の諸課題への対応

1. 関係機関等との連携・協働の促進等

- 信頼ある書籍の刊行や出版文化を維持するために、図書館・学校図書館・出版社・書店が一緒に取り組むことが重要である。
- 今後の図書館の方向性を示す基準につながる議論をしていきたいと考える。全国の公共図書館の底上げをし、市民にとって真に必要とされる図書館となるための基準づくりやその議論ができればと思う。
- 本と出会うとわくわくするような空間を大事にしていき、そのような図書館の活用をどう考えていくか、そのような場を大人がどうつないでいけるか。地域の中で、多種多様な人たち

のネットワークを考えていくことが必要だと思う。

2. 今後の図書館・学校図書館に求められる人材の育成等

- 都道府県立図書館がそれぞれの地域の図書館力を向上させていくことに寄与するためには、
どういう役割を担えばいいか、司書はどのようなスキルを身につけていけばいいのかについて
議論ができると良い。
- 司書のスキル、配置・処遇等に関わる制度の在り方も全て非常に大事なことだと考える。
- 学校司書の「資質向上」と「処遇の改善」の、どちらを先に整えれば改善していくのかと
いう状況がある。そのような学校司書を視野に入れて議論を進めたい。

3. その他

- 地方の学校（中学校）では古い本が残る実状も見られ、蔵書の充実の必要性を感じる。専門的な人員が配置されると学校図書館の活用は加速する。人的配置の充実も必要。学校図書館の施設の整備についても「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」最終報告（令和4年3月）で示されたように学校図書館に「ラーニング・コモンズ」の役割を持たせることや、子供たちが安心していられる施設にすることが考えられる。

以上